

## ■「棲息」から「春の夢」への改題

夜逃げ同然で家族が離れて暮らさざるを得なくなった状況から始まる「棲息」は、物語が後半へ進むほど希望をともなつて幕を閉じます。宮本氏が「春の夢」という題に変えようと決めた「棲息」連載の後半部といえば、「青が散る」の連載が終了してまもなくの頃です（下表参照）。

「文学界」に連載中は『棲息』<sup>せいそく</sup>というタイトルだった。第二回目の原稿を渡す時に、題が決まっていなかったんです。どうしても自分がこれだ、と思う題が浮かばなかった。もうスタートすることが決まっていたから、それで一応『棲息』って付けたの。（略）

この小説は書いてる時はものすごく嫌だった。どうしても自分のイメージと違うものがどんどん進行してるっていう感じだね。

（「宮本輝自身による自著全作品解説」『月刊カドカワ』1990年5月号より抜粋）

連載の途中で、「棲息」という題に嫌気がさしてきた。その題が、あまりにも小説の内容とくつつきすぎているような気もしたし、「棲息」だと、何もかもに出口がないではないかと思えたのだった。

連載が後半部に入ったあたりで、私は「春の夢」という題に変えようと思った。けれども、連載小説が途中で題を変えたという例は、私の知るかぎりなかったの、改題は単行本化される際に行なうしかあるまいと考え、「棲息」のまま連載を終えたのである。

（『宮本輝全集』第四巻 後記 新潮社1992年刊より抜粋）

## 青春小説を描いた背景

「道頓堀川」「青が散る」「星々の悲しみ」「春の夢」は、恋愛、スポーツ、読書などに打ち込む大学生や浪人生が主人公の青春小説です。芥川賞の受賞からちょうど1年後の1979年1月に、宮本氏は結核のための入院生活を余儀なくされます。入院したのは、「青が散る」の連載が始まって間もなくのことでした。病気療養に専念するため約1年間の休筆後、「青が散る」連載第3回目

が再開されるのはさらにその1年後の1980年でした。

病気療養に専念するとはいえ短篇は書き続け、自宅療養中の1980年秋に「星々の悲しみ」を執筆しています。そして、1982年から連載の始まる「棲息」とちょうど同時期に、ライフワークとなり今も書き続けている流転の海シリーズ第一作となる「流転の海」の連載が始まります。

## ～宮本輝著作年表～

